

版画の宿命

斎藤清

二十年来版画をやつてきて今日の隆盛を見るとは夢にも思わなかった。

今でも大部分の人は版画をやつていると云えば、ああ浮世絵ですか、と一言にかたづけられたことは、度々経験しましたその説明に、うんざりし腹立しくもあつた。

絵を見て初めてこれが版画ですか、まるで画のようですね、に至つては二の句がつけません。十数年前上野美術館の薄暗い地下室で、友人達と版画展をやつていた時の事を思い出すが、一日何人ともは入らない会場にならべて悦にいつていた時が懐しくもある。

今から五年前に、ある若い人が曰く今までは、はずかしくて版画をやつていると他人に云われなかつたが、この頃はむしろ版画をやつているというに興味を持つて見てくれるようになったと述懐していたが、戦後一年一年向上したことは事実である。このような状態は日本ばかりでなく、いろいろな国際展の交流によつて外国の事情なども明らかになつてきた。

今までアメリカの版画界もわからなかつた。あちらでもかなり前から制作されていたが、ここ十年間の進歩は

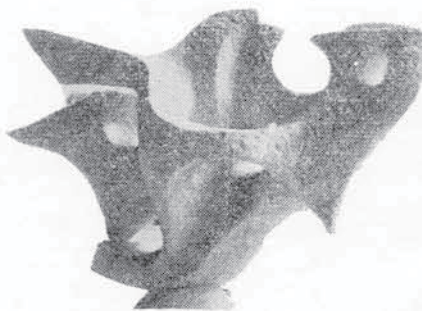


めざましいものがあるとか、日本の状態と一寸似ているように思う。それに日本に進駐してきた人達が、日本現代版画に興味をもち本国に紹介してくれた展覧会の回数も相当な数にのぼつている。

現在もなおいたるところで日本版画展が開かれている状態である。

アメリカは歴史の短い国だけに、良いものはどこからでも吸収しようとする意欲が強く多くの画家達はヨーロッパで勉強してきているので、石版、エッチングの技術はすぐれている。アメリカで一週間ばかり石版を習つたが木版に比較して、かなり自由性が多い点など、油絵をやられる人達には興味深いものがあると思う。日本は今まで版画は画家の余技としか考えていながつた人が多いので普及がおくれたが、今や世界的に盛んになると、この道にはいつてくる人も数を増すにしたがつて、わが国独得の、石版、エッチング画家も輩出し画壇も一段と賑やかさをますというもの。

目下外国で開かれる国際展といえは版画が一番はなやかにデビューしているようだが、日本で無視されたものが外国で大きく取り上げられ、それが反映して改めて日本で見なおされるといつた、皮肉な面も版画界の一断面。日本で好かれるもの、あなたが外国には歓迎されず、外国でうけるもの、日本では好まれなと、いつた変な現象もある。かつては浮世絵がたどつたように日本の木版もそんな運命にあるらしい。



失敗への努力 山内壮夫

入つて投げ出そうか、しがみついて頑張ろうかと烈しい葛藤がつづく、そしてうす暗くなつたアトリエを出る時は「今日も失敗か」と呟くのが日課の台詞になつてしまつた。

幾日やつても振出しにばかり戻されている僕は、彫刻などという特殊の職業についてのが僕の人生の飛んでもない誤算であり大きな不幸でなかつたかと、自分自身に対する反抗に思い悩んでしまう有様だ。

才能への不安と不満は誰でも常にもつものだが、いくら努力しても努力だけでは到達できない芸術の道はなんと恐しい魔ものであろうか。

僕が学校を出た時はじめて高村光太郎先生のお宅に伺い「崇高なる美」に直面したような気持でお話を拝聴した折「ほんとうの彫刻を作ろうと思つたら、とても食うことはできませんよ」と彫刻家生活の矛盾と困難を色々話して下さつたがその「ほんとうの彫刻」という言葉はその時は実に輝かしい実体として、そして自分もいつかはその栄光に満ちた「ほんとうの彫刻」を作る作家になるのだと努力の蓄積の報酬を夢みた青年時代の安易さを笑う気にはならないが、さりとして肯定するわけにもゆかない。

先日、巴里でジャコメツティーと深交を結んできた矢内原氏がジャコメツティーの制作生活の様子を評しく話してくれた中で、彼は午頃起きてコーヒーとパンの一片を食うや仕事に取りかかる。そして一本の線を引くのも一点に土をおくにも数分か数十分の時間を要し、真剣勝負のような緊張感の連続が夕方まで続くのだそう。その間不安と不満の言葉がヒステリックに発せられたり絶望のどん底に落ち込んだ苦痛のうめきに苛られる。夕方に一休みするとまた新しい希望をもつてすぐ仕事にかり大休夜の十一時頃まで続けて夕食になる由。食後はもう一度アトリエに入つて明け方までなんとか今日仕事に一歩でも前進をさせようと苦闘をつづけるが、遂に失敗に終つてベッドにもぐり込むのがこの三十年間の変らざる日課だそうで、モデルになつた矢内原氏がよいよい巴里を發つ日、別れの挨拶をしにジャコメツティーのアトリエを訪れた時、まだ出発まで一時間の余剰を知ると「では一寸仕事をやつてみよう」とキャンパスの前に立つや今まで二カ月かかつた未完の肖像画の結晶をナイフでけずり出し2カ月前と同じ状態で筆を運び出したにはまつたく驚きましたと感激をもつて話されたが、聞く自分もジャコメツティーには較べものにならぬ浅薄な努力で「今日も失敗か」は甚だ口はばつたい台詞で、自分などはまだその台詞をいう資格はないことを改めて知らされた。

芸術とは努力だけでは把握できない才能の問題に違いないが、その努力すら努力していない自分を省みて、永遠の振出しに立つこともまた至難なことであると痛感する。

今日こそは何か若々しい意気込みをもつて毎朝アトリエに入るのだが、最高潮の三時頃からは苦痛と不安が重なり合つた重苦しい気分が落ち

岡部君のかくし芸

三 雲 祥 之 助

岡部君のことについて、私が書くことは、適任でないと思う。岡部君とおつき合したのは、私の妻のマリ子を介してのことだったし、マリ子の方が、私よりも、もつと、長くて深い心の交渉をもつていたし、彼の死の二三日前も見舞つたりもしていたからである。

しかし最初に紹介されたのは、昭和年11、2の頃だったろうか、帰朝して、西武電鉄の下井草に居をもつて間もない頃だったと思う。まだ初春の土の黒々とした、麦畑の間から、洋傘を手に持つて婦人同伴の二人連れが駅の方へ歩いてきた。それが岡部夫婦だった。紹介したのは当時独立美術展に出品していた角浩吾だった。岡部君は好感のもてる青年画家らしい人だったが、それにもまして印象に残つたのは、岡部文之助という、二枚目や小姓役にふさわしい、ゴロをもつたその名前だった私は帰国したばかりで、画壇には不案内だったので、彼がどんな絵を描く人か知らなかつたし、彼もまたおそらく私については何も知らなかつたろう。私はまだ、どこへも出品していなかった。

あれから二十年、そして今、彼はいなくなつたと思うと、まつたく、真午の夢のようである。各自は、それぞれその知人の傍を、各自のどこかに抱いて生きている。そしてその人達もまたすべてを昨日のこのように思いながらやがて地上から消えてゆくのであろうが、これが人の運命というものか。

岡部君の病気のことは、随分、以前から聞かされていた。私も同じ病氣だった。相憐むの気持をもつていたのだが、彼はそんな気配は微塵も見せず、漂々と歩き廻り誘われれば、何時も、平つちやらの顔で飲んでいるようだった。

しかし彼の顔には、何時しか、ある諦観というか、何か、投げ出したような表情が刻み込まれていた。年のせいでだつたかも知れない。それがまた言いようもなく淡々な風貌を与えていた。

何時だつたか、全道展の集りの席で隠し芸がはじまつた。国松君のような名うての芸人の後で彼は、洋傘一本をもつて「ここはお国の何百里」を独演した。ちよつとニヒルな表情と動作と歌とは、異質なものの、不思議な調和をみせて、素晴らしいという形容などでは間に合わないほどこれらの心の中にしみじみと滲透してきた。私は一流の本職の芸能人達が、なにかの会合で、さらけ出す、隠し芸とも、表芸とも言えるものをしばしば見る機会に接したことがあつたが、岡部君のようなあんな深い味のあるものに接したことははじめてだつた。なんと、という淋しさ、なんとという外脱感だつたろう。それは、何時までも何時までも私の心によみ返つてくるのである。

岡部君のこと

松 島 正 幸

岡部君の遺作を整理しながら、色々と回想するのだが

人柄がさらりとして、清潔な人だつたせいも、どの思い出も、爽快な気持の良いものばかりだ。きつと誰の胸にも、そうしたものを残して行つたことだろう。

元気な時は、酒もよく呑んだ。夜も深更になると、益々冴えてくるので、私のような眠りがりには一寸苦手だつた。酒の芸にも、独特の味があつて、あの武士のような顔の「ぐりぐり」とよく廻る大きな眼が、なんとも言えずユーモラスだつた。

唄つても、踊つても、独りでに、にじみ出るような雲囲気を持つていて、人々の心を、なごやかにした。全道展の集りには、やはり無くてはならぬ一人だつた。

彼の絵は、はじめ重厚な、フオビズムの匂いの強いもので、林武先生の影響が見えるが、素朴な力強いタッチで、今見ても、新鮮な感じのするものである。

二科に初入選の作品も、その頃の静物も、今度出品されている。その後の傾向は、段々とリアルな感じになつて、デフォルマションが、影を秘めて静かな自然観照の時代になるべく永く続くようになる。

それは、どうした所見根拠が、あつたかは、わからないが、おそらく、戦争とか、病氣とか、色々なものが、影響したのだから。

亡くなる二年位前から、今度は、形よりも色彩に、強烈な原色が動き出して、エネルギーシユな明るく強い感じになつてきた。

病勢が、かなり進んでいたようだが、作品は華やかで病人臭いところなど全然ない。

かつて一中時代に、スキーの選手だつた頃の、頑張りというか、不屈の精神が、彼を生かしていたのだから亡くなる十日位前も、階段は呼吸が切れるね、などと云いながら、銀座の友人の個展にも現われる有様で、君の顔を見ると、麻雀がやりたくなつたなど、いうと、やろうかと応じたほどだから、誰一人そんには病勢が進行してるとは、知らなかつた。

亡くなる一週間前まで、5、6丁余もある病院に、歩いて通っているし、誰にも死の影は見せなかつた。しかし彼自身は、ひそかに、というよりも、はつきり死期を覚悟して、大悟してたようなところがある。

永くなるから、やめるけれど、死の瞬間まで、ユーモリストだつた。私には、あんなに悠々と人生に、さよならする自信はない。

主治医の小川先生にきくと、3年位前に、もう駄目だつたような身体で、よくまあ元気で北海道中、をそれも辺りなどころばかり選んで旅行していたものだときれる。

昨年、今年と若い居串、岡部両君を、次々と失つたことは、なんとしても、淋しく惜しいかぎりである。

故居串佳一君を偲んで

菊 地 精 二

北海道の東北端網走はオホーツク海をようして正にさいはての地、居串君はここでとれた魚のような男だつたというのは君の絵の中にあるあの底光りのする色彩や黒潮のような線のあつた頃を思い出すから。

君が絵画的主張に一致をみて独立展に参加して丸坊主にどた靴をはいて網走から絵を下げてきた頃をいつもな